

『自由論』第3章においてジョン・スチュアート・ミルは、他者に危害を加えないかぎり、人々は自由に行為することを許されるべきであるということの根拠として、それが「幸福の主要な要素の一つ」である「個性の自由な発展」を促すという点を強調している（CW XVIII: 260-75）。そのような正当化は、「功利主義は、性格の高貴さの全面的な陶冶によってのみその目的に達しうる」という『功利主義』の一節（CW X: 213-4）がよく示しているように、功利主義的な目的を実現しようとする際に、もっぱら諸個人の性格形成という手段に着目するミルの思想の特徴を反映していると言えるだろう。

しかしながら、自由がミルの言うところの「高貴な性格」、すなわち自分と他者の幸福に資するような性格を出現させるための重要な条件であることはそれほど自明ではないように思われる。仮に、利他的に行為することを強制的な仕方でも人々の習慣とすることが可能なのであれば、そうすることで諸個人の自由委ねるよりも効果的に、全体の幸福に資する人間を生み出すことができるのではないだろうか。ミルは「個性」という言葉によって、各人の自己陶冶を経て形成された諸個人の多様な性格のことを意味しているようだが、そのように多様な「個性」と、功利主義的に望ましい「高貴な性格」との間にはギャップがあるのではないだろうか。

『自由論』第3章は、ミルが以上のような反論に応答しようとした箇所として読むことができるだろうが、その叙述はわかりやすいものではない。そこでの彼の意図を把握するためには、「それを完成させ、美しくする（perfecting and beautifying）ために人間の生が正しくも用いられる人間の諸々の作品のうちで、第一に重要なのは間違いなく人間自身である」という一節（CW XVIII: 263）に示唆されているように、ミルが人間の性格の卓越を美的追求の対象として理解していることを踏まえる必要があるように思われる。例えばコリン・ハイトはミルの美学上の見解を踏まえ、芸術的な創作活動においては完全性（perfection）それ自体が目標となるのと同様に、個人の自己陶冶においても他者の基準によるのではない、自分自身の基準による完全性の追求がなされねばならないとミルが考えていたことを指摘している（Heydt 2006: 33-6）。そのような解釈は興味深いものであるが、しかし単に芸術的な創作活動と自己陶冶のアナロジーを指摘するだけでは、上述の反論に答えたことにはならないだろう。自己陶冶が諸個人による美的な追求であるとして、それではなぜ自由な環境でなされる自己自身の性格の卓越の追求を、功利主義的に見て他者からの強制より望ましい性格形成の方法であるとミルが考えたのかを明らかにする必要がある。本発表ではこの課題に取り組みたい。

#### 参考文献

- Heydt, Colin, 2006, *Rethinking Mill's Ethics: Character and Aesthetic Education*, Continuum.  
Mill, John Stuart, 1963-91, J. M. Robson general ed., *Collected Works of John Stuart Mill*, 33 vols., University of Toronto Press and Routledge.